朝顔病院

中学二年　　M・S

学校に着くには、恐ろしい傾斜の坂を登らないといけない。
早瀬菜々は、憂鬱な気持ちになって、その坂を見上げた。
地獄坂と呼ばれ、生徒たちから疎まれているその坂を前に、菜々は大きくため息をついた。坂をやっとの思いで登り切り、校門を抜けた。校舎に入り靴を履き替え、階段を登れば目の前に自分の教室が現れる。この代わり映えのない日常が、菜々にとっては退屈で仕方がなかった。

「はい。席につけー」
担任の井上が教室に入ってくると、水を打ったように静まり返った。広い教室に井上の声が響く。
「えー、明日から始まる夏休みの宿題についての話をしたいんだが、まあもう各教科から出されていると思うが。まだ出されてないもの、あったよな？」
生徒達は顔を見合わせざわつき、首を傾げた。どんな宿題が出るかは、この夏の運命を大きく左右するのだ。緊張した面持ちの生徒達を前に、井上は満足した様子で、口角を上げて意地悪い笑みを浮かべながら言った。
「自由研究。まだ出されてなかったよな」
その言葉を聞いた生徒たちが、悲鳴に近い声を上げる中、菜々はひとり机につっぷした。最悪だ。
「今年の自由研究は地図作りになった。クラスを八つの班に分けて、班ごとに、学校周辺の地図を作ってきて貰おう」
戸惑いの表情を浮かべる生徒を見渡しながら、井上は話を進めた。
「地図の範囲とか作り方は、班で話し合って決めろ。班のメンバーは予めこちらで決めておいた。何か質問はあるか」
「はーい」
と、真っ先に手を挙げたのは、菜々の斜め左前の席で、机に落書きしながらつまらなそうに話を聞いていた、燈台奏斗だった。
この年頃は、皆遠慮がちになって、自主的に手を挙げる人は少なくなるから、クラスが白けたり先生がイラつき始めるという、最悪パターンが成り立つ原因になりかねない。
だから、奏斗のような存在は、本当に貴重なのだ。
「地図の提出期限はいつです？　あと、作った地図はどうなるんですか？」
奏斗の質問に、皆の無言の集中が集まった。

「ああすまん。大事なこと言い忘れてたわ。地図の提出は二学学期の始業式だ。いつかは決めてないんだがいずれ発表とかできるといいなって思ってるから、そのつもりでいてくれ。いや、すまんすまん。すっかり忘れてた。燈台、ありがとうな」
井上は、国語担当の三十代位の男性教員だ。ルックスが良いので一部の女子生徒には人気があるが、忘れっぽいのが玉に瑕だと、生徒に陰口を言われている。
奏斗は、
「いえ～」
とか、機嫌よさそうに答えていた。そんなお調子者。見ている者を幸せにする才能を持っているのだろうか。クラスの雰囲気が一気に良くなった。
「じゃあ、もう質問はいいか。班を発表するぞ。ええ班、吾妻、高梨、中山、吉田、渡辺。二班はー、ええ青山、富樫、西、葉山、宮崎、村田。三班は……」

「お～い早瀬、聞こえてんのか。早瀬菜々」
奏斗に、大きな声で呼ばれた私は慌てて振り向いた。
「何してんだ。とっくに皆移動してんぞ。あっ！　お前まさか先生の話聞いてなかったとか。ぶは！　だっせぇ～～。お前、俺と一緒の班だぜ」
奏斗に菜奈は教室の隅まで引っ張られていった。そこには奏斗のほか、クラスメイト二人の姿があった。倉見蓮と一条楓だった。
蓮は、奏斗とは対称的なタイプの男子で、勉強はできるが、運動は全くできない。体育の授業でバスケをやった時など、敵チームにボールパスはするわ、ルールまる無視でボールを持ったままダッシュはするわ。挙句の果て何もない所で一人で転んで眼鏡を壊し、そのうえ頭を強打して意識不明になり、担架で保健室に運ばれていった。
そんなポンコツな面もある蓮だが、人当たりが良く、学級委員になるほどに皆から慕われてもいる。
「よろしくね。早瀬さん」
蓮に、にこやかに挨拶された菜々も
「うん。よろしく」
と、あいさつを返した。
「じゃあ、俺から自己紹介。燈台奏斗十三歳。よろしく」
自己紹介しろだなんて、一言もいわれていないし。菜奈は心の中で、皆、十三歳か十四歳じゃない、とツッコミをいれた。
「なるほど。奏斗さんはまだ十三歳なんですか。じゃあ私の方が年上ですね。一条楓、十四歳です。よろしくお願いします」
菜奈は思った。この班にはもしかして天然な奴が多いのかもしれない。だとし

たら自分にこの班は合わないだろう。
　しかしそのすぐあとに、どんな班も自分には合わないか、と思い直して、菜奈は微かに乾いた笑みを浮かべた。上辺だけ取り繕って仲良くするとか、そういうのはうんざりだったのだ。
「僕は、倉見蓮。一条さんと同じく十四歳。でもクラスメイトなんだから名前わかるよね。自己紹介意味あった？」
　蓮が正論を言ったから、既に自己紹介を済ませていた奏斗と楓は、衝撃をうけた表情を浮かべ、二人で顔を見合わせ、照れくさそうに笑った。
　楓の、
「それもそうでしたね。でも改めて、ということでいいじゃないですか。最後、菜々ちゃんも、自己紹介お願いします」
　この一言で三人の顔が菜々の方を向いた。菜奈は注目されることが好きではないから、微かに顔をしかめたが、このまま注目を浴びたままなのもごめんだった。
「早瀬菜々、十三歳。よろしく……」
と簡単な自己紹介を済ませた。
「挨拶はそこそこに、どこらへんの地図を作るか、決めようか」
　蓮は、学級委員をやっているだけあって、さすがに進行が上手い。同時に特技がある人間はいいな、と菜奈は思った。中二になったら、自分の特技が見つかるかもしれない、自分も変われるかもしれないと期待していた四月から、もう三ヶ月。期待はただの期待のままだ。
「学校周辺五、六百メートル位が丁度良いんじゃないですかね」
「そうだね。そうしようか。地図は夏休み中に皆で集まって作るってことらしいから、いつ集まるか決めとかないと」
「まだ予定とかわかんねえよ。家帰って確認しないと」
「じゃあ、連絡先を交換しておきましょう。パインやってますか？」
「もちろん」
「じゃあ、私がグループを作りますね」
「ありがとう」
　菜々が参加する間もなく、話し合いは進んでいった。自分が透明人間であるかのようで、少し寂しく、少し心地よい感覚を菜奈が味わっていたのも束の間、
「早瀬さん、パインのグループ名は何がいい？」
と、蓮が声を掛けてきた。
「別に何でも。って言うか、何で私に訊くの」
　蓮は、菜々に一瞬戸惑ったように見えたが、「早瀬さんセンスよさそうじゃん」

と、何の迷いもなく直ぐ返答した。
「私センス悪いよ。でもまぁ……。じゃあキャピルマで」
「キャピルマ？」
「うん。ラテン語で髪って意味。この班はみんな髪型の個性強いから」
「あはは。確かにね。僕はマッシュルームカットだし、奏斗は触角の主張激しいし、一条さんは髪サラサラすぎて怖いし、早瀬さんはちょっと天パだよね。なるほど。あれ？　でもなんでラテン語なんかわかるの。すごいけど」
「小さい頃にちょっとだけ習ってて」
「へぇーー。すごいね。ねぇ皆も、キャピルマでいいよね」
「いいよー」
皆から良い評価を貰えて、菜々はひとまずほっとした。
「じゃあ、今日帰ってから、連絡取り合おっか」
丁度その時、井上が、
「もういいかー。そろそろ皆がお待ちかねの成績表を返したいんだが」
と叫び、生徒達は、いやいや席へと戻っていった。

井上が生徒たちに成績表を渡していった。
菜々も受け取り自分の席へと戻って、周囲の目を気にしながら成績表を開こうとして、誰も私の成績なんて気にしないかと思い直し、堂々と成績表を開いた。
そこには、散々な成績が並んでいたので、菜々は半笑いを浮かべた。中間試験も期末試験も頑張らなかったし、提出物も真面目に出してはいなかった。
去年はこんなじゃなかった。今年になって急激に下がったのをみたら、両親はどんな顔をするだろうか。
塾に通うことになるかもしれないな。それも悪くない。塾に通えば去年入っていたテニス部を辞めた言い訳ができるし、放課後誰とも遊ばず真っ直ぐ家に帰っているのも、虚しくなくなるかもしれない。

井上が「さようなら」と、号令をかけてから、菜奈は今日も一人教室をすぐに出た。なにかされているわけじゃない。無視されているわけでもない。ただ、ちょっと浮いてしまっただけ。そもそも浮いてしまったのも自業自得。それでも一人で居るのは寂しいし。すごく退屈な、重い足取りで菜奈は地獄坂を下って行った。

「ただいま」
家のドアを開けると、リビングの方から母親がやってきて、満面の笑みで菜々に話しかけた。

「おかえり。学校はどうだった」
「楽しかったよ」
菜々も、満面の笑みを返した。初めの頃こそ抱いていた嘘に対しての罪悪感など、今はもう感じていない。
「おやつは何がいい？」
「うーん。先に着替えてくるね」
二階の自分の部屋に向かいながら、菜々は、笑いそうになるのを必死に堪えた。娘の言う事を疑いもなく信じ切っている母が、滑稽に思えて仕方なかったのだ。
「お母さん、私はあなたが思っているほどいい子じゃないんだよ。」菜奈は話しかけたが、心の中の母親は返事をしなかった。
部屋に着くなり菜々はベッドに倒れ込んだ、とその時、通学鞄の中で「ピロン」と音が鳴った。スマホの着信音だった。
学校で作った『グループパイン』に、蓮から
「明後日って皆空いている？」
という通知がきていた。そして続けざまに、
「急だけど、地図作りは結構時間掛かると思う。早く始めないと終わんないかもと思うんだ」
とも送られてきた。
菜々は「空いてる」とだけ返信し、着替えて母の待つリビングへ降りて行った。

班メンバーの全員とも明後日集まることになったのを、結果的に知った菜々は、母親にそのことを伝えた。
娘に甘い母が「だめ」と言う筈もなく、明後日は地図作りをすることになる。学校周辺を廻って、何所に何があるかを調べるらしい。
蓮から、
「ノートと筆記用具は絶対に持って来て」
というメッセージが、菜々にも届いた。

その晩、菜々と一緒にニュースを見ていた母が、
「あら。良かったじゃない」
と言った。菜奈は上の空にしていてニュースをよく見ていなかったが、母親の指差すテレビの画面をみて何を言いたかったのか察した。アナウンサーが天気予報について話している。明後日は、七月にしては涼しくなるようなのだ。
「明後日、涼しいらしいわよ」
ついている、というには共感できないけれど、涼しいことは悪くない。暑いことが苦手な菜奈は、そう思った。

「楽しみねぇ。明後日」
さすがにこれには答えず、誤魔化そうと目の前にあった麦茶を、菜奈は飲み干した。冷たくも熱くもない、生温いお茶が喉を通っていった。

夏休みが始まって二日目。
約束の集合場所に向かうと、菜々以外の班メンバー全員が既に集まっていた。
「これで全員揃ったね。じゃあ行こうか」
蓮の先導で一同、移動を始めた。
「今日、お昼ご飯はどうします？」
「近くの店で、適当に食おうぜ」
そんなことを話すうちに、あの地獄坂のふもとに着いた。
「学校周辺から始めて、だんだんと学校から遠ざかる感じで、調べていこうと思うんだけど、皆いいかな」
「いいですよ」
全員賛同したので、蓮の案通りに調べることになった。

メモを取りながらの調査は順調に進んだ。
「そろそろ昼食を摂ろうか」
と話しながら、どこにでもありそうな住宅地を歩いている時だった。

最初に気付いたのは、楓だった。
「こんなところに、病院って。ありましたっけ？」
楓の指差す先に、少し寂れた大き目の病院が建っていた。
「いや。無かった気いするけどな。まあこの辺俺ん家から、ちょっと離れているから、ただ知らなかっただけかもしれねぇけど」
「僕の家はこの辺じゃないから知らないなあ。早瀬さんは？」
「私も」
菜々は、頭を横に振った。
「ちょっと近寄ってみよう」

三階建てほどの病院。
看板には『朝顔病院』とある。
スマホで調べていた蓮が、画面を見ながら言った。
「精神科病院みたいだね。全然存在を知りませんでしたね。ここもメモしておきましょう」
そうして皆が、手元のメモ帳に病院の場所をメモして、立ち去ろうとしていた

その時。
　知らないおばあさんが病院入口から出てきて、奏斗の着ていた服の袖を掴んで、言い出したのだ。
「こうちゃん。こうちゃんじゃない。来てくれたの。こっちよ。私のお部屋に来てちょうだい」
と、奏斗を引っ張っていこうとした。
「え？　おれ奏斗だけど。あれ、俺って、こうちゃんなんだっけ？」
と突然のことに驚いたのか、奏斗も、よくわからないことを言い出した。
　その時、
「あぁー、すみませんねえ」
と、看護師が病院入口から追ってきた。そして、
「横野さん違うでしょ、その方は。こうちゃんじゃないのよ」
と言い、奏斗の袖からおばあさんの手を離させようとした。
　しかし横野さんと呼ばれたこのおばあさんは、看護師の手を振り払い、無理やり病院の中に奏斗を引っ張って行ってしまった。看護師が慌てて二人を追い掛けて中へ入って行く。
　あまりのことに、残された三人は呆然としながらも顔を見合わせ、恐る恐る病院入口ドアに手を伸ばし、内側へと足を踏み入れた。

　病院の中には、医者、看護師、それと入院患者と思しき格好をした人達が、ちらほらと見える。
　奏斗とおばあさんと先ほどの看護師が、少し先で何か言い合いをしている。
「行ってみよう」
　蓮の言葉に、楓と菜々は無言でうなずき、三人が近づいていくと、看護師が、
「ごめんなさい。横野さんね、認知症なの。奏斗くんのことを
お孫さんと勘違いしちゃったみたいなの。もし時間があったら、横野さんの病室
まで来てくれないかしら。きっとそれで気が済むから」
と三人に説明し、頼み込んだ。
「まぁ、別にいいですよね」
　楓が菜々、蓮そして奏斗に向けて問いかけた。皆は頷き返した。
「ごめんなさいね。でもありがとう。ねえ横野さん。良かったですね。こうちゃんが、お部屋に来て下さるってよ」
　横野さんはニコニコして、奏斗を連れて行ってしまった。菜々達は慌てて追い掛けた。横野さんの病室は二階にあるらしい。
　一同はエレベーターに乗り、二階は病室がずらりと並んでいた。普通の入院病棟とは少し違って、部屋のドアにはしっかりとした鍵がついている。至る所に防

犯カメラも設置されている。そして患者一人に必ず一人以上の看護師や医者が付き添っていた。

「こうちゃん。ここよ、ここが私の部屋なの」
「はぁ、そうっすか」
横野さんが奏斗を部屋に招き入れ、菜々達もそれに続いて部屋に入ると、看護師がしっかりと鍵をかけた。
菜々は見逃さなかった。
「ああ、これ。規則なのよ。鍵をかけないといけないの。横野さんは認知症患者さんだからまだいいけど、ここは精神科病院だからね。隙あれば自殺しようとするような患者さんもいらっしゃるからね」
菜々は
「そうなんですね……」
と答えた。

話は弾んで病室を出る頃には既に四十分が経っていた。
「皆さん本当にありがとうございました。横野さんもこれで満足でしょう」
看護師に頭を下げられ、手を振る横野さんに見送られながら、皆は病室を後に、エレベーターへと向かった。

その時。
先頭を歩いていた菜々にとっては、信じられない出来事に思わず立ち止った。言葉が喉を通らない。全身の毛穴から冷や汗が、そして背筋がすうっと凍りつくのを、菜奈は感じた。
「早瀬さん？　どうしたの？」
ただならない菜奈の様子にいち早く気付いた蓮が、声をかけ、菜々の視線の先を見た。蓮も何かを察したようだ。
楓と奏斗には訳が分からない。

蓮が、長い沈黙を破った。
「桐生さん……だよね？」
桐生芙美。菜々や蓮と同じ学校を去年三学期終わり頃に退学してしまった子だ。
ここで言わなくては一生後悔してしまう。
「ふ、み。あのね。私ずっと芙美に……」
菜々は、動け、私の手足と念じて、芙美に近づこうとした。

「来ないで」
と、桐生芙美は一言言い放ち、一人で歩いて行ってしまった。芙美の腕には、痛々しい包帯が巻かれていた。
芙美についていた看護師が、口を開いた、
「芙美ちゃんのお友達？　ごめんね。芙美ちゃんは今あまり調子がよくないの。また今度にしてくれると助かるわ」
菜々達が芙美に会いに来たのだと看護師は勘違いしたようだ。看護師はそう言い残すと、芙美の後を追い掛けて行った。
事態を理解できていない、奏斗と楓は、何かを聞きたそうな顔をしたが、それを無視して菜奈はエレベーターの方へ歩き出した。三人がそれに従った。
四人は無言でエレベーターに乗り込み、楓が「1」と書かれたボタンを押した。ドアが閉まりやがてエレベーターは二階から一階へと下ろうとしたが、止まってしまったのだ。

「え。あれ？　これもしかして、エレベーター止まっちゃいましたか」
妙に明るい声で楓が、でもおどけた声とは裏腹な不安を隠しきれない表情を浮かべている。
「まじかよ。故障ってこと？」
「大丈夫だよ。エレベーターが故障した時は非常ボタンせば。あれれ？　押してるんだけど」
そういって蓮は非常ボタンを押した。通常はメンテナンス会社に繋がる筈なのに……何も起こらない。楓が、
「私たち、閉じ込められちゃったってことですか」
泣きそうな顔をした。
「でもここって病院だから、大きな音だしてりゃあ、誰か気付いてくれんじゃね？」
そう言って奏斗はエレベーターの壁を叩き出した。奏斗につられ他の皆も、壁をドンドン叩いた。菜々も必死に叩いた。
いくら叩いてみても、誰かが気付いてくれた様子はない。四人が諦めかけたその時、不意に「ガクン」とエレベーターが大きく揺れ、もの凄い勢いで上に登りだしたのだ。四人は耐えられずに、尻餅をついた。楓は、「やった。動きましたね。直ったってことですか」
素直に喜んでいたが、蓮の態度は違った。
「登り過ぎだ。この病院は三階までしかなかった。故障したのは二階と一階の間だったよね。なんでこんなにいつまでも登り続けているんだ？」
「ええっ」

皆絶句した。
そもそも病院は三階建ではなかったのか。はたまた私たちの頭がおかしくなってしまったのか。混乱している脳裏で、菜々は冷静に考えを巡らそうとした。いや、病院は確かに三階建てだ。建物の外からも確認していたし、エレベーターの行き先階ボタンは「3」までしかない。せめて今どこに居るのか、分かればいいのに。一向に止まる気配がないエレベーターの中で、菜々は思った。
病院は建物もエレベーターも古く、何階に居るかを示すモニターは読み取れなかった。
菜々達が困り果てる中、エレベーターが「ガクン」と大きく揺れた。次は何が起こるのか。不穏な空気が流れた。菜々の目の前でうずくまっている楓が、不安そうな顔で天井を見上げる。

「チーン」
音を立ててエレベーターが止まった。
ゆっくりとドアがあいて、薄暗いエレベーターの籠の中に、光が入ってきた。
ドアが完全に開いても、四人はなかなか立ち上がることが出来なかった。
そこには、先程菜々達が居た二階があった。

「どういうことですか」
かすれた声で楓が呟く。蓮はゆっくりと首を振る。
「わ、わかんねえけど、エレベーターから出ようぜ」
奏斗がこう言って立ち上がった。三人もそれに続いて立ち上がり、エレベーターから出た。

「病院の人に、エレベーター壊れてること言った方がいいよね」
蓮が、皆に同意を求めたので、菜々ものろのろと頷いたがあんなに不思議な出来事を、病院の人に信じて貰えるだろうかとも菜奈には感じられた。
病院の人を探して、まもなく、「応接室」と書かれた部屋の中で、机を拭いている看護師が見つかった。
「あのう、すみません」
蓮が、その看護師に恐る恐る声をかけた。看護師は、横野さんの病室を出た後に、出会った芙美と一緒にいた、あの看護師だった。
看護師はこちらを振り向くと、はっと顔をこわばらせ、次の瞬間、机に突っ伏し泣き出してしまった。
看護師が落ち着くのを待って、蓮が

「どういうことですか」
と尋ねた。
「看護師さん、桐生さんと一緒にいらっしゃいましたよね」
「あぁ、どうか何も言わないで聞いてね。あなた達、この前来ていたでしょう」
「この前？　ですか」
四人は全員、その言葉に、何とも言えない違和感を覚えた。菜々も思わず「どういうこと？」と蓮に目で訴えた。蓮は菜々に「分からない」とばかり、首を振った。
「住野です」
と名乗ったこの看護師と四人が出会ったのは、つい先程なのだ。時間感覚に少々の個人差はあるにしても、「この前」とはさすがに言わないだろう。しかし訂正されることなく、住野さんの話は続いている。

「あのあと、桐生芙美さんの様子が、おかしくなってしまってね。寝ている時もうなされたりして。今日もあの日と同じく、桐生さんに会いに来てくれたのよね」
あのあととは。
四人にとっての違和感は、だんだんと確実なものに変わっていった。「あの日って。この人、住野さんは、一体なんの話をしているのだろう」
さっき芙美に会った時も、そして今も、四人は桐生芙美に会いに来ている訳ではない。そしてそもそも芙美がここに入院していたなんて誰も知らなかったのだ。このことが心の重しとなって菜奈から離れない。
「桐生さんとは、もう、会えないのよ」
嗚咽を交えながら、住野さんは話した。
「私が、トイレに行ってた間に、シーツで首を……。うあ……」
「ええぇっ」
菜々達の口から、思わず驚愕の言葉が漏れた。
「病院と、親御さんには、私のせいじゃないって言われたわ。でも違うの。全部私のせいよ」
住野さんはそう言い切ると、また泣き出してしまった。
「ごめんなさい。本当に私のせいで」
その場から菜奈は動けなかった。耳に届く言葉が全て異国のもののように感じられ、息を吸うのも苦しい。頭には激痛が走り、思わずその場でうずくまってしまった。
「早瀬さん。大丈夫？」
蓮が近づいてきて、菜奈を立たせてくれたが、蓮の声も、腕も、何かに耐える

かの様に小刻みに震えている。同じく、ショックを受けているようだった。
一方、楓と奏斗のショックは菜々や蓮ほどではないようだ。
「どういうことだよ。住野さん。俺達は桐生って奴とあんたに、さっき会ったんだ。冗談抜かしてんじゃねえよ」
「ちょっと！」
今にも住野さんにつかみかかろうとする奏斗を、楓が間に入って慌てて止めた。
「すみません、住野さん。失礼しますね」
楓はそう言って奏斗を連れ部屋を出てしまった。丁寧な話し方だったが表情は硬かった。

菜々と蓮はおずおずと、二人について部屋を出た。四人は無言になって、自動販売機の前のソファーに腰掛けた。
「どういうことですか。住野さんの話も意味わからないし、そもそも桐生さんって誰なんですか。知り合いってことですよね。ちゃんと説明してください」
「それは……」
楓の問いに答えようとした蓮を、菜々は制した。驚いて、話をやめこちらを向いた蓮に、菜奈は首を振った。
「いい。私が話すよ。芙美はね……」

今日から中学校生活が幕を開ける。私はワクワクしながら、新しい制服に袖を通した。私が住んでいる地区では、高中小と蒼峰小、この二つの小学校に通っていた生徒が、椿原中に集まる。単純計算すると、学年の半分が知らない人、ということになる。
人と仲良くなるのが上手い。私にとってそれは密かな自慢でもあった。だから、きっと沢山友達を作れるに違いない。高中小に通っていたときも、クラスの人気者になれていたから、きっと中学校でもそうなれるに違いない。そんな気持ちを胸に学校へ向かった。

「おはよう。私、早瀬菜奈。菜奈でいいよ。よろしくね」
クラスに着き自分の席に荷物を置くと、私は見たことのない生徒に声をかけた。きっと、蒼峰小から来たのだろう。
「おはようございます。桐生芙美です。芙美でいいですよ。よろしくお願いします」
芙美は、丁寧に返した。長い黒髪を下ろして、女の私が見てもドキッとするほど可愛らしく、整った顔立ちをしていた。

「芙美は、蒼峰小から来たの？」
「あ、いや違います。つい最近引っ越して来たばかりなんで…」
「へぇー。どこから引っ越して来たの？」
「東京からです。父の仕事先がこの近くになって……」
「えー！　すっごい！　じゃあこんな田舎じゃ退屈なんじゃない？」
「そんなことないですよ」
「っていうか、敬語やめてよ。同級生じゃん」
芙美と話していると、辺りからの視線を感じた。ふふ、注目されてる。私は、むずがゆいような、それでいて気持ちのよい感覚になった。芙美は、皆から注目を浴びるくらい本当に可愛くて、私は絶対に芙美と友達になってやろうって思った。
実際、芙美とはすぐに友達になれた。私達は毎日、駅前の古びた雑貨店やカフェに入り浸ったり、互いの家に遊びに行ったりと楽しく過ごした。
ずっとこの幸せが続くと信じ切って、疑いもしなかった。木々が青々と茂ってきた五月頃、芙美と一緒にテニス部に入部した。部活に入るつもりは無かったけれど、芙美と一緒だから楽しかった。
でも、楽しかったのは最初だけ。もともと運動が得意ではない私に比べ、芙美はどんどん上達していき、私は取り残されてしまった。

そんな時、アイツが声をかけてきた。あの悪魔みたいな女。本当にどうして仲良くしてしまったのだろうか。
「早瀬さん、だよね。ずっと前から仲良くなりたいと思ってたんだよね。友達になってくれない」
「え……」
藤岡蘭。同じクラスの女子。彼女についての情報を頭の中で整理した。高中小出身で、確か資産家の孫で金持ちだったはず。
「もちろんだよ。藤岡さん」
私は答えた。
「やったー嬉しいよ、菜奈。よろしくね。あ、あたしのことは蘭でいいよ」
「わかった」と涼しい顔をして言ったつもりだったけれど、実際少しにやけてしまっていたかもしれない。
蘭は、人気者でありながら、近寄りがたい雰囲気を持っている。いや、人気者というよりもクラスの女王といった方が的確な表現かも。そんな蘭に、「友達になって」と言われるだなんて。私は鼻高々、意気揚々とその場を去った。

次の日、教室に入ると、私の席の周りを、蘭を含む数人が取り囲んで話をして

いた。
いつもなら即座に回れ右、教室から出て図書室にでも行くか、荷物を持ったまま芙美の席にでも行くかの二択だが、今日は違う。
思い切って自分の席まで行って、「おはよう」と蘭達に挨拶した。
「おはよう、菜奈」
蘭がにこやかに返事するのを、蘭と一緒に話をしていた数人が驚いたように見つめたが、すぐに
「お、おはよう」
「……。おはよう」
「おはよ！」
と口々に挨拶を返してくれた。
高梨沙羅と、新山優香と、白音舞。私は口の中で名前を連呼した。みな蘭と仲がいい。クラスの中で輝いている人達。
「皆、菜奈も仲間に入れていいよね」
蘭が三人と私に向かって言った。三人はあからさまに戸惑いの表情を浮かべたが、結局このグループの流れを作っているのは蘭だ。
「あーいいよ。ね」
新山と白音の反応を伺いながら、高梨が答えた。
「良かった」
最初から、こうなることが分かっていたような顔で、蘭は笑った。

「ピロン」
勉強机の上に伏せたスマホの音が鳴った。私は慌ててスマホを手に取り、電源を付けた。
早く気付いて良かった、と私は安堵した。案の定、パインの通知音だった。もちろん蘭からのパイン。急いで返信してから、溜息を付いた。別に早く返信しろ、だなんて言われた訳ではないのだが。不安になってしまうから早く返信するようにしている。

近頃、テレビでも頻繁にいじめについての報道が流れたり、学校でも、パインで早く返信しなかったことが、いじめの発端になったりしたことなどを聞かされた。
大人達はきっと、例を見せることで抑止になると思っているのだろうけれど、私は逆効果だと思う。私は、学校でそんな話を聞くまで、返信の早さなど気にしたこともなかったが、話を聞いてから不安がちになってきたからだ。
こうやってスマホの通知ばかり気にしたままなのが、良くないことは私も分

かっている。夜も良く寝られなくて寝不足だし、成績がた落ちのうえ、部活も集中できていない。
「ピロン」またスマホが鳴った。私は慌ててスマホを手に取った。

「ねぇ、菜奈ってさぁ、芙美と仲いいわけ……？」
蘭達と仲良くなってから一ヶ月くらい経っての初夏。その間、芙美とはほとんど話していなかった。
「え……？」
それってどういう意味、と続けようとしたところを、蘭に遮られた。
「そのまんま。そのまんまの意味だよ。どうなの」
まるでそう言うのを分かっていたかのように蘭は言った。
「仲良かったけど、今は普通」
話の意図がわからないまま、私は慎重に答えた。「普通」という言葉は本当に便利なものだと最近よく思う。イエスでもノーでもない言葉は、実は少ない。誰だって、危ない橋は渡りたくない。今回も私は、イエスでもノーでもないこたえ言葉を口にした。蘭は私の答えに満足はしたらしい。
「ふぅん。ならいいんだけどね」
不自然なほど、赤い唇を吊り上げて笑った。
「私さぁ、あの子のことあんまり好きじゃないだぁ。そっかー。菜奈もあんまり仲良くないんなら、いいよね……。ねぇ皆、あの子のことハブらない？」
ハブる。
窓際の、明るい席に座りながら、不釣り合いな暗い言葉を使う蘭を、私は信じられない心持ちで見つめた。
どうして突然芙美のことを、ハブるなんて。
「菜奈。仲良くないんでしょ。菜奈が仲良くないって言ったんだよ。だから、ね」
高梨も新山も白音も。どうして何も言わないのだろう。
このままじゃ、まるで私がハブろうって言ったみたいな雰囲気になってしまう。
と思ったところで、ああそうかと納得した。蘭は全責任を私になすりつけたいのだ。
もしかしたら最初に私に、友達になりたかったと話しかけてきた時から、ずっと計画していた事だったのかも。私は利用されたのかもしれない。ずっと、どうしていきなり私に友達になって欲しいと言ってきたのか、引っ掛かっていた。
私はクラスの中で人気者にはなれなかった。高中小では人気者だった私も、中学生になって蒼峰小の子と混ざったら、大したことなくなってしまった。人数が

増えれば増えるほど、それだけすごい人も増えることを、私は嫌というほど体感した。きっとそうだ。私は利用されたんだ。「いやだ」と一言言おう。それから、こんな酷い人達から離れて、芙美のところまで行って、一言謝って……

「うん。いいよ。ハブろう」
後に芙美の運命を大きく変えてしまう一言は、私の声をしていた。

それからは、とんとん拍子に、ことは進んだ。
クラス内を自由に動かしている蘭が、全員に、芙美を無視しろ、とお触れを出し、文字通り皆で芙美を無視した。
次に、芙美の持ち物を隠して、壊して……。

芙美が教室に顔を見せなくなるのはあっという間だった。
それでも、初めのうちは学校には来ていたらしい。保健室で過ごしていたようだが、そのうちそれもなくなった。
コートが必需品になった十二月頃のことだった。冬休みに入って、自分の犯してしまった罪の重さに耐えられなくなって、数週間悩んだ末、蘭達のグループから離れることを決意した。
蘭達に何かされてしまうのでは、と怯えたものの、芙美を教室から追い出すことに成功した蘭達は既に満足していて、私など眼中に無いようだった。
蘭達から離れたことで、私の足枷は外れた。芙美が戻ってきたら謝ろう。許して貰えなくても、卑怯だと喚かれても、地に手をつき額を地面にこすりつけて詫びよう。そんな私の思いは芙美に届くことなく、一緒に進級すること叶わず、芙美は学校を辞めてしまった。

「それ以来、桐生芙美とは会っていない。倉見君は同じクラスだったから知ってるだろうけど、二人はクラス違ったから知らなかったよね」
全てを話し終わると、菜々は薄く笑った。
「本当に悪いことをしたと思っているよ。私の一言で始まってしまったことだから。叶うことなら謝りたい」
「そんなことが。知りませんでした」
楓はショックを受けたようだ。
「僕も、無視をしたんだ。本当に謝りたいと思っている。ただ、その前にこの状況だよね。今、僕が考えている仮説は二つ。一つは、住野さんが嘘をついている。でも僕はこの可能性は低いと思う。住野さんには嘘をつくことで得られるものは一つもないだろ？もう一つは……　タイムトラベルだ」

「は……？　タイムトラベルなんて有り得ないだろ」
奏斗が、蓮の突拍子もない仮説を否定した。
「そうですよ。そんなこと有り得ませんよ。もしかして冗談ですか。全っ然笑えないですよ」
奏斗に便乗して、楓も否定した。
「いたって真剣だよ。僕だって有り得ないことは分かっているよ。じゃあさ、誰か他の仮説ある人いる？」
途端に全員黙り込んだ。否定した奏斗と楓も、居心地悪そうにするだけで、何も言えなかった。
「ね……？　ないでしょ」
「でも、タイムトラベルなんて……」
今度は菜々も、否定した。
「さっき、エレベーターおかしくなったよね。それが引き金になったんじゃないかと僕は思うんだ。まぁ、有り得ないと言えば。それまでなんだけど」

「エレベーター？」
いつまでも登り続けたあのエレベーター。すごく上昇したように感じたのに、実際には一階分も登っていなかった。
「じゃあ、逆にここはどこなんですか。私たちが病院を訪れた後に芙美さんが自殺したって、住野さん言ってましたよね。仮説が正しければ、ここは未来ってことです」
「ん～　何とも言えないが、せめて今の日付とかが分かればな」
楓の問いに、蓮も困ったような表情を浮かべた。
「スマホを見ればいいんじゃねぇの？」
奏斗が、もっともなことを言った。
「それが、さっきから時間が動いていないんだ。おそらくエベーター乗り込んだ時間で止まっている。エレベーターに乗り込んだ時、僕は時間を確認している。その時間で止まったまま動かないんだよ。当然日付も変わってない。僕のだけじゃないんじゃない？」
蓮が反論した。菜々も時間を確認したが、確かに動いていなかった。
「じゃ、じゃあよ、その辺を歩いてる人に、聞くとか」
「そうしようか……。やってくれる？」
蓮が、いやな役を奏斗に押し付けた。
今日は何月何日ですか～？　なんて聞いたときには、変な顔をされるに間違いなしだ。
「あ～。もうわかったよ……」

奏斗は少し嫌そうな顔をしつつも、そう言った。
「売店を探すっていうのはどうでしょう?きっと今日の新聞が売っているんじゃないですか?」
楓が案を提示した。
「売店。一条さんナイス。思いつかなかったよ。それでいこう」
かくして、菜々達は今日の日付を知るため、売店での新聞探しを始めた。売店は案外早く見つかった。新聞もしっかり売っている。蓮が、それを手に取って、いそいそと会計をしにいった。菜々は、別に日付を確認するだけなのだから、買う必要などないのではないかと思ったが、蓮はそれを許さなかった。
「どうだ?」
売店から出てきた蓮のもとに、奏斗が駆け寄った。
「まだ見てない。開くよ? 1、2、」
「3!」
合図で新聞は開かれた。四人の目がそれに釘付けになった。
「×月×日……」
かすれた声で蓮が呟いて、軽く笑った。
「決まりだね。タイムトラベルだ」
私達の居た世界から、五日後の世界だったのだ。

「さぁ、どうしよっか。問題が山積みだ」
四人は、もうそれほどに驚かなくなっていた。むしろ、エレベーターの不調、住野看護師の不可解な言動、これらが一度に解決されたことに、ありがたみさえ覚えはじめていた。
「今、考えなくてはいけないことは二つ。一つは、どうやって五日前に戻るか。もう一つは、桐生さんをどうするか」
蓮が今の状況を簡潔にまとめた。
「後者の方なんだけど、桐生さんを助けたい。僕は、去年早瀬さんや桐生さんと同じクラスだったけれど、いじめを見て見ぬ振りしたんだ。笑えるよ。自分だけはそんなことしないと信じていたんだけどなぁ……」
明るい口調とは裏腹に、蓮の目はとても悔しく、寂しそうな色をしていた。

「私も、救いたい」
菜々は、自分が何を言っているのかしっかり確認しながらゆっくりと話した。
「芙美の自殺は、きっと私のせい。私と会ったから思い出しちゃったんだよ。まだ謝れていないし。謝りたい。でも見たでしょ。私の拒まれかたを。芙美が学校をやめてからも、何とか会って謝れないかと試みたんだけど、門前払いだっ

た。虫がいいことは分かってるけど。二度も手遅れになりたくないんだ。一人じゃあ止められる気がしないの。お願い、一緒にやって欲しい。手伝って欲しい。だからお願いします」
「うん」
菜々の必死な思いに、奏斗が二つ返事を返した。
「もち。最初からそのつもりだった。一条もそうだろ？　人が自殺するかもってなって、はいそうですか、って見捨てるわけないじゃん。なぁ」
「はい」
と、楓も頷く。
「二人とも……。ありがとう」
菜々は、深く頭を下げた。
「本当に、ありがとう。じゃあ、もう一つの問題、タイムトラベルについてなんだけど」
蓮が、話の流れながらも困ったような顔で、蓮にしては珍しく助けを求めるように問うた。
「どうしようか」
「ど、どうしようって、それはよぉ、俺達に聞かれても……。なぁ」
奏斗も困りきった顔をしたが当たり前といえるだろう。
「あの……」
楓が遠慮気味に口を開いた。
「私達が、この五日後の世界に来てしまった原因って、きっとエレベーターですよね。急上昇して止まらなくなったエレベーターでしたけど、結局一階分も上がっていなかった。その着いた場所は五日後の世界だった。だから案外もう一度エレベーターに乗れれば、五日前に戻れたり、なんてしませんか」
「エレベーターか……。絶対って確証はないけれど、五日前に戻れる可能性はあるかも……。いいね。少しでも可能性がありそうなのは全て試すべきだよ。そうして元々僕らの居た五日前に戻れたら、桐生さんの自殺を食い止められるかも知れない」
蓮が楓のアイデアに賛成し、奏斗と菜々も頷いた。
「たださぁ、住野さんの言ってたことが本当なのか、もし本当ならいつ起こったことなのかとか、調べてから五日前に戻れた方が、すぐに戻るより助けやすいってもんじゃね？」
奏斗が意見を述べた。
楓が不安そうな表情で言った。
「でもどうやって調べるんですか。それに正直、私はやく私達の生きていた世界に戻りたいです。こんな訳の分からない世界に居たくないです」

「俺だって早く戻りてぇけどよ。本気で助けてぇんだったらそれくらいしねぇと。やっぱり助けられませんでしたとかは、俺は嫌だぜ？」
「そ、それは私だって嫌ですけど」
奏斗の言葉に、楓は口ごもった。
「私も調べてからの方がいいと思う。せめて自殺してしまう日にちだけでも知りたい」
「そうだね。じゃあ出来るだけの情報をつかんでから、一条さんの言った通りエレベーターに乗ってみよう」

「あのう、すみません」
菜々は、背中に冷や汗をぐっしょりとかきながら、受付の女の人に話し掛けた。エレベーターに乗るのが怖かったので四人は二階から階段でおりて一階まで来たのだ。
「はい、どうかされました？」
三十代くらいで愛想の良い受付の女の人が快く応じた。
女の人の背後には患者のカルテが並んでいるようだ。
「先程、七十代くらいの男性患者の方が、あのドアを開け中に入って行くのが、見えました」
菜々はそう言うと、関係者以外立入禁止と大きく書かれたドアの方を指さした。
四人の作戦は、受付の女の人が一人になったところを見計らって声を掛け、無人状態になったその隙に、桐生芙美のカルテを確認するというものだった。
「えぇっ！　それ、本当？」
受付の女の人は動揺して、受付ブースから出てくると、
「見てきますね」
とドアへと歩いていった。
菜々は心配そうな顔を作りながら後を追い掛けた。追い掛けざまにちらりと振り返ると、無人状態になった受付ブースに近づいていく三つの怪しい影があった。
「どうですか？」
菜々は、受付ブースの方を気にしながらも、半開きになったドアから中を覗き込み、女の人に声を掛けた。
「う～ん。居ないわね。確かに見たのよね？」
「は、はい。もしかしたら、私がおねぇさんに話し掛けていた間に、出ていってしまったのかもしれないですね」
「そうね。そうかもしれない。患者さんなんて何処にもいないもの」
部屋の中は薄暗く、メーター類がついた機械が並んでいた。

「うーんきっとそうね。わざわざ教えてくれてありがとうね」
受付の女の人は優しく菜々に笑いかけ、部屋を後に、受付ブースへと戻っていった。後ろ姿を見送った菜奈は、踵を返して、少し離れたところで待つ蓮、奏斗、楓のもとへと駆け足で戻った。

「どうだった？」
三人は親指を立てた。
「早瀬、グッジョブ！　受付の人を引き留めてくれてた間に、ほれ！」
奏斗は自慢気にスマホ画面を差出した。そこには芙美のカルテが写っていた。
「写メ撮ったんだ。カルテは桐生芙美。間違いなく桐生さんのだよ。入院したのは一ヶ月くらい前。理由は重度な心的外傷後ストレス障害。ＰＴＳＤだね。それに伴う不眠、自傷行為、あぁ、初めてここに来たのは五月か。始めは自宅療養だったみたい。で、重症化したためここで長期入院と……」
蓮が、カルテ写真に書かれていることを一つずつ詳しく読み上げた。
「急いでて僕たちもまだしっかり読めてないんだよね。これが最後の写真か。きっと自殺した日が書かれてる。さあ見ようか」
蓮が、しゃっと手慣れた手つきで画面をスライドした。
「ええと、×月×日。僕たちの居た五日前の二日後か。要は今から三日前にこの世から居なくなったんだ」
蓮は淡々と言った。菜々は両手を握りしめた。伸びすぎた爪が手のひらに刺さって痛かった。

四人は階段を使って二階に戻り、エレベーターの前に立っていた。
「じゃあ乗るよ。いいね」
理由は勿論、元の世界、すなわち五日前に戻ることだ。
「上手くいくかは運次第ってやつだね」
蓮はそう笑うと古ぼけたエレベーターに片足を突っ込み、遅れてもう片方の足もエレベーターの中に踏み入れた。三人もそれに続いた。
「ねぇ、ボタンは何階を押すべきだと思う？」
「急上昇して、この世界に来たから、下を押すべきだと思うけど」
「そうだよね。僕もそう思う。ねぇ皆。ボタンを押す前に言っておくけれど、これもし、この計画が上手くいって、五日前にこのエレベーターで戻れるとするなら、多分このエレベーター、急降下するよ」
言い切るなり、蓮はすぐに「1」と書かれたボタンを押した。
刹那。
エレベーターは少し降下してから一瞬止まり、次の瞬間、急降下した。

四人の体は、揃ってエレベーターの床に打ち付けられた。遊園地のドロップタワーみたいだと場違いなことを考えているうちに、菜奈の意識は薄れていった。

「早瀬さん。起きて。早瀬さん」
誰かに肩をゆすられ菜々は目を覚ました。汚い床、壁紙のはがれかかった壁、六つの靴。はっと、体を起こすと目の前には三つの顔。
「成功したかもしんない」
蓮がにっこり満面の笑み浮かべて、動き出したスマホの時計を菜々に見せた。
「ほら！」

菜奈は途中から気絶してどれくらい落ち続けていたかわからない。足がおぼつかなくなったから、相当の間エレベーターは落下し続けていたのだろう。
「1」と大きく書かれた柱を見て、菜々は自分が泣きそうになっていることに気がついた。
半信半疑で安心する気持ちをまだ早いと必死に制しながら、四人がエレベーターを降りふらふらと彷徨っていると、病院に設置されてたテレビから、
「×月×日のニュースをお伝えします」
という声が聞こえてきた。
菜々達は思わず歓声をあげた。
「戻ってきました！」
楓が、興奮した声で叫んだ。

四人は、夢を見たような気分で病院を後にした。
五日後に過ごした時間はカウントされないのだろうか？
病院の外は、夏の昼過ぎのうだるような暑さだった。
「これからだよ。明後日、桐生さんが自殺することは僕らしか知らない。僕らが止めるんだ。四人で人を救おう」
「うん」
菜々は、大きく頷いた。
「とりあえず、このあとどうしようか」
蓮が皆に聞いた。四人とも、地図作りどころではなくなっている。
「そのことですが。私の家に来ます？」
楓が、遠慮気味に提案した。
「え、いいの？」
はい、と楓が頷いた。

「うおお？　すげぇーーーー！」
奏斗が大歓声をあげた。蓮と菜々も、目を丸くして驚いた。「大豪邸」とはこういうものですと、楓の家はそんな豪邸だったからだ。終わりの見えない広い庭に、よく手入れされた噴水。誰が通るんだと言いたくなるほど大きな玄関扉、そして何人もの家政婦のお出迎え。
父親はただのサラリーマンで一般的な家に住んでいる菜々は全てに驚かされた。自分の家が余裕で入りそうな位に大きい。
楓の部屋に通され、何料理かわからない豪華な昼食をご馳走になったあと、菜々はようやく我に返って、楓に問うた。
「ねえ。なんでこんなすごいとこに住んでいるの」
「別にそんなすごいところではないですけど、ただうちの会社が代々続いてきた大企業というだけで」
「一条んちは、昔から金持ちだからなぁ」
同じ小学校に通っていた奏斗が口を挟んだ。
「すごいね……」
「いえ。そんなこと。メイドさんたちには、この部屋には入らないよう伝えてあります。どんな話をしても大丈夫ですよ」
楓はそう言うとにっこりと笑った。

「普通に、オーソドックスに止めるべきじゃねぇか？　んで、謝りやぁいいじゃん。反省しているから、やめろって」
「確かにそれが一番気持ちが伝わると思います」
「明日、まず病院に行ってみる？　会えるかわかんねぇけど…」
「そうですね」
「じゃあ明日ダメもとで」
「時間がないですしね。やれることはなんでもやりましょう」
「先手必勝ってやつだな」
これが吊り橋効果というものだろうか。今日一日で四人の結束は強まっていた。
菜々は久しぶりに味わう感覚を嬉しく思う反面、芙美のことが気掛かりで仕方なかった。
明後日の芙美の自殺は、既に証明されている。このことが心に重くのしかかって苦しい。
昨日と違って病院に招待されたわけでもないから、四人のやっていることは完全にいけないことだ。四人はそっと病院の中に滑り込むと、急いで階段の方に

向かった。階段を駆け上がると、蓮がメモ帳を開いた。
「皆。二四一号室を探して。最初に桐生さんを見たのも二階だったし番号的にも二階で間違いないとは思う。見つけたら、必ずパインで連絡して。そしてここに集合。ＯＫ？」
「はーい！」
蓮の言葉に、楓が大きく手を挙げて返事をした。
「じゃあ」
蓮の合図で一斉に、二四一号室探しが始まった。

「二一七、二一八、この部屋も違う」菜々は一つ一つの部屋番号を確かめていった。岐れ道に差し掛かった時、柱に矢印と二三五～二五〇と書かれていたのを見て、菜々の心臓は爆発寸前まで鼓動を強めた。息を吐き出し、生唾を飲み込むと、ゆっくり右に曲がった。
二三八、二三九、二四〇、二四一……その番号を見て菜々の心臓は跳ね上がった。中の見えない扉にピッタリ耳をくっつけ、部屋の中の物音を聞こうと試みた。誰かが話している声がかすかに聞こえる。
菜々はその場からそっと十ｍほど離れると、震える手を何とか押さえつけてスマホをリュックサックから取り出した。焦っていたからか、暗証番号を何度か間違えた。ようやくホーム画面に辿り着き、見慣れた緑のアイコンをタップした。
「見つけた」と短く連絡すると、菜奈はその場を小走りに立ち去り、約束の集合場所へと駆け出した。恐怖よりも、一刻も早く集合場所につきたいという気持ちが勝っていたのだ。

「早瀬さん！」
集合場所には、既に蓮と楓が到着していた。菜々と奏斗が来るのを今か今かと待っていたようだ。
「見つかったって」
蓮が必死な表情で尋ね、菜々は、息も絶え絶えに頷いた。
「うん。はぁ、見つけたよ。はっはぁ。こっちの方にあったよ」
菜々が息を切らせながら、自分の走ってきた方角を指した。奏斗も遅れて到着してきた。息を切らしている。
「ごめん、遅くなった。早瀬、見つけたって本当か」
「うん。こっち」
奏斗が到着するなり、菜々は走り出した。体が勝手に走り出すような先走る気持ちを乗せて菜々の体はさらに加速した。三人が慌てて、走ってついていく。
「ここだよ」

菜奈の体は見覚えのある扉の前で急停止した。菜奈は短く息を吐いて呼吸を整えた。蓮も、覚悟を決めたようだ。楓と奏斗も緊張している。
「大丈夫ですよ二人とも。今日が駄目だったら、明日止めればいいんですから」
楓が、二人を励ました。その言葉に押され、菜奈と蓮は一歩進んで扉の前に立った。
蓮が手を伸ばし、律儀に扉を四回ノックした。正式な時のノックは四回が常識なのだ。

「は～い」
女の人の声が聞こえた。おそらく、芙美の住野看護師の声で間違いないだろう。
「どうぞ～」
声が近づいてきて、扉の近くまでやってきた。ガラリ。スライド式のドアがゆっくりと開き始めた。菜々の推測通り住野さんが顔を見せた。
「あら昨日の。どうしたの？」
「こんにちは。桐生さんにお会いしたくて。お会いさせていただけないでしょうか」
先程まで強張った表情をしていたのが信じられないほど、蓮は、朗らかで丁寧な物腰で尋ねた。
「芙美ちゃーん。なんか、お客さん来てるよお」
住野さんが部屋の奥に向かって言葉を掛けた。
「え。お客さん？」
部屋の奥で誰かが返答し、こちらに近づいてきている気配が菜々達にも感じられたが、住野さんに隠れて見えない。
「ほら」
住野さんが扉の前をあけた。菜々達にも、近づいてきた人がはっきり見えるようになった。
「芙美」
菜々から言葉が零れ落ちた。みるみるその人の表情は固まっていった。
「何っっ！　なんでここに！　あんたがいんのぉぉー！！」
芙美は叫んだ。辺りにいた全員の耳がしびれるくらいの大声。絶叫だった。
「何しに来た！　帰れっっ！　消えろ！　帰れぇぇーー！」
芙美が菜々に殴りかかろうとしたので、あまりの大声に圧倒されていた住野さんが我に返り、慌てて仲裁に入った。しかし、振り上げられた拳は勢いを失わず、住野さんの頬を謝って殴り、大きな音を立てた。
「大丈夫ですか!?」
様子を見て、蓮が慌てて駆け寄った。

「大丈夫よ。ただ、できたら男の先生を探して連れてきてくれないかしら。私一人では押さえつけられない」
芙美は今も、住野さんの腕の中で暴れ続けていた。
「芙美。今日は話があってきたの」
取り乱した芙美を見て、菜々は逆に冷静になって話出した。
「あのね。私ずっと芙美に謝りたかった。本当に。ごめんじゃ許されないことは分かっているつもりだよ。でも、でもねっ…」
菜々の目から、自然に涙が零れ落ちた。次に菜奈は地面に膝をついて額を地面にこすりつけた。
「ごめんなさい。ごめんなさい。あんなことして。それなのに私、芙美がどうしているかすらも知らなかった」
菜々はしゃくり上げながら、必死で思いを伝えようとした。
「ごめんなさい」
「あのね」
静まり返った病室に、芙美の冷たい声が響いた。
「ふざけんなよ、お前。自分が何したか分かって言ってる。私の学校生活も、親との関係も、心も。壊したのは誰だと思ってんの」
「私、です」
「あぁ、分かっててこれなの。てっきり分かってないのかと思ったよ。あのさぁ、私を何だと思ってるの。あんなことされてさ、全てを壊されてさ。謝られて、いいよって許せるほどの心の広さ、あいにく持ち合わせていないんだ。ねぇ、何で泣いてんの。お前、自分に泣く権利があると思ってんの。まぁ、私も知ってるよ。藤岡蘭にやれって、言われたんでしょ。それは知ってる。あいつらのこと、本当に許せない。でも、自分の身を守るために私を売ったあんたはもっと許せない。ねぇ、そんな申し訳なさそうな顔すんなよ。思ってもいないくせに。どうせ、私が許したあと蘭達と仲良く遊ぶんだ」
「違うよ」
芙美の言葉に、菜々は首を振った。
「何が違うんだよ！」
芙美が再び大声を出した。住野さんがさらに強く、芙美を抑えた。
「早瀬さんが言ってることは本当だよ。早瀬さんは、自分の意志でここに来たいって言っていた。藤岡さんとも、とっくに縁を切っているよ」
蓮だった。横には大柄の男の医師も来ている。
「誰かと思えば。偽善者が口を挟まないで。自分は皆のことを一番に思っていますって顔しておきながら、何もしてくれなかったくせに」
「うん、ごめんね。僕は偽善者だったよ。でも、だから口を挟むなっていうのは

違うでしょ。早瀬さんは、ずっと桐生さんのことを気にかけていたよ。持ち前の明るさを捨てて、教室内でわざと一人になり、部活も辞めた。これを聞いても、まだ早瀬さんの思いが伝わらないの？」
蓮に真直ぐに見据えられ、芙美は目を逸らした。
「伝わらない全然。じゃあ、これ知ってる？　私、昨日お前らに会ってから、さっきまでずっと寝てたんだ。お医者さんによると、強いショックを受けたからしいよ。知らなかったよね。じゃあ、これ知ってる？　私、いま自殺したいとか考えてる」
菜々は、ひゅっと短く息を吸い込んだ。もちろん、知っている。それを止めるためにここへ来たのだから。
「止めて」
「なんで？　自分が殺したみたいになっちゃうから？　責任取るのが嫌だから？」
「違うよ。それは、違う」
自然に真っ直ぐ前を向き、大きくはっきりとした声が菜奈から出た。菜奈は自分の声に驚いたが、芙美はもっと驚いたようだった。
「なんで……」
芙美の口からかすれた声が出た。
「なんで、そんな顔して言うの……」
芙美の顔が歪んだ。
「ずるいよ……」
芙美の目に涙が溜まり、みるみるうちに、一筋の涙が頬を伝った。
「私ね、退院したら引っ越すんだ」
芙美は泣きはらした赤い目でそう言った。口元には笑みも浮かべていた。
「新しい土地で、新しくやり直そうと思う。最後に、菜々に会えて良かった」
「そうなの……？　頑張ってね……。まぁ、私がこんなこと言うのはおかしいんだけれど」
「んーん。ありがとう。菜々のせいじゃないことは、心のどこかで分かってたよ。それにきっと……、私が菜々だったら同じことをしてたよ。でも、最後、こうして仲が良かった頃に戻れて、心置きなく、新生活を始められる」
「いつ、退院するの？」
「いつかなぁ。この怪我が治ったらかな……」
芙美は、包帯の巻かれた自分の手と、心臓あたりを指差してみせた。
「毎日来るよ。お見舞いに」
「え～？　いいの？」
「うん」

「僕も来るよ」
蓮もそう言って笑った。奏斗と楓も、それぞれ自分を指さした。
「私も来ていいですか？　桐生さん。友達になって下さい」
「俺も！」
「え～、やだ、私もしかして人気者⁉」
芙美はそういうと軽快に笑った。菜々達も声を出して笑った。白い病室にオレンジ色の夕陽が差し込み、笑いあう少年少女の顔を明るく照らした。

「私、明日退院することになった！」

菜々達がいつものように病室の中に入ると、芙美が嬉しそうに報告した。
「退院したらすぐに引っ越すんだ。二学期から、向こうの学校に通えたらなぁなんて。折角仲良くなれたのに寂しいけど、向こうで頑張ってみるね。たまに、寂しくなって連絡しちゃうかもな……。朝早くに退院するから、皆と会えるのは今日が最後かも」
「え～。寂しいです……。もう、毎日連絡します！」
「元気でな！」
皆、口々に思いを言った。その日は皆、夕方まで病室に留まった。
別れの挨拶をして四人は病室を出た。菜々は、最後に病室を出ようとし、思い留まって後ろを振り向いた。そこには、芙美が、ちゃんと立っていた。
「ありがとう」
菜々が言うと、芙美はにっこり笑った。
「元気でね」
うん、と頷いて菜々は病室を後にした。

「間違えた」
病院入口の扉を開いて、始めて菜々は自分の間違いに気付いた。本当は駅前の本屋で問題集を買うつもりだった。ところが習慣というものは怖い。一週間あまり病院に通い続けた菜々の足は勝手に病院入口の扉の前まで主人を運んでいたのだ。そして何故だかわからないまま直ぐに動作を止めることが出来ず、病院入口から中に入ってしまった。
菜奈は慌てて出ようとして、はたと動きを止めた。
「えっ……」
思わず驚きの声が漏れてしまった。

元々、ボロボロな病院だとは思っていた。壁紙が剝がれ掛かっていたし、床は黒ずんでいた。しかし、ここまで酷くはなかった。数日ぶりに訪れた病院は、数日前よりも遥かに劣化が進み、ゴミや瓦礫が散乱し、椅子などボロボロ。
今にも倒壊してしまいそうになっている朝顔病院がそこにはあった。

「あれ。こんにちは」
近づいてきた人に、声をかけられた菜々は、無意識のうちに会釈を返した。近づいてきたその人を改めてまじまじと見ると、奏斗を自分の孫だと勘違いした、あの横野さんだった。
「横野さん。なんで……」
「久しぶり」
菜奈の耳に届いた横野さんの声には、何とも言えない違和感があった。初老のおばあさんで、前に会ったときはそれ相応の声色をしていたのに、今は声が違うのだ。
横野さんの口を開くたびに、幼くて、高い声。小学校低学年の男子のような声が聞こえるのだ。
「横野さん、声が……」
「あぁ、この声？　あはは。聞こえるんだ。君の心の傷が癒えた証拠だよ。良かったね」
「どういうこと……　ですか？」
「ん～？　ねぇ、今病院が違って見えたりしてない？」
「はい。違って見えてます。これはどうして……？　というか、あなたは一体……？」
「僕はね、なんていえばいいかな……。そうだな、例えればこの病院の支配者ってとこかな。ここで起きる全てのことは、僕のせいなのです」
横野さんは、芝居掛かった様子で話した。
「この病院には、心が傷ついた人が来るんだ。心が傷ついた人には、ちゃんとした病院に見える。でも、そうでない人には、ただの廃墟にしか見えないんだよ。君には、今は病院が廃墟のように見えてるでしょ？　例えばあそこで歩いてるあの人。あの患者さんも、それからお医者さんも、看護師さんも。あの人達には今でもまだ、君が見ていたような、病院が見えているんだよ」
「心が傷ついた人」
「そう。君は桐生芙美のことでうんと心を傷つかせてた。倉見蓮もそう。一条楓は友達ができず苦しい思いをしていたみたいだし、燈台奏斗は、家で肉親に無視をされていたんだ。桐生芙美は、わかるよね。皆心が傷ついていたんだ。僕は皆の心の傷を治してやってるんだよ」

「あなたが、私達を動かしたってこと？　じゃ、じゃあ、あのタイムトラベルも」
「あぁ。五日後に送ってあげたやつのことかな。そうだよ」
「どうやって、そんなことを」
「説明は不要さ。言っても、分かんないと思うよ」

「ねぇ、あなたは一体誰なの？」
「僕ぅ？　横野英恵。七十六歳の認知症患者だよ」
幼い声で、横野さんは言った。
「最後に教えて。ここは何なの？」
「ここは朝顔病院。
　人々の心を癒す病院。朝顔病院」